

揖斐大橋

中部地方の
選奨土木遺産

令和元年度登録

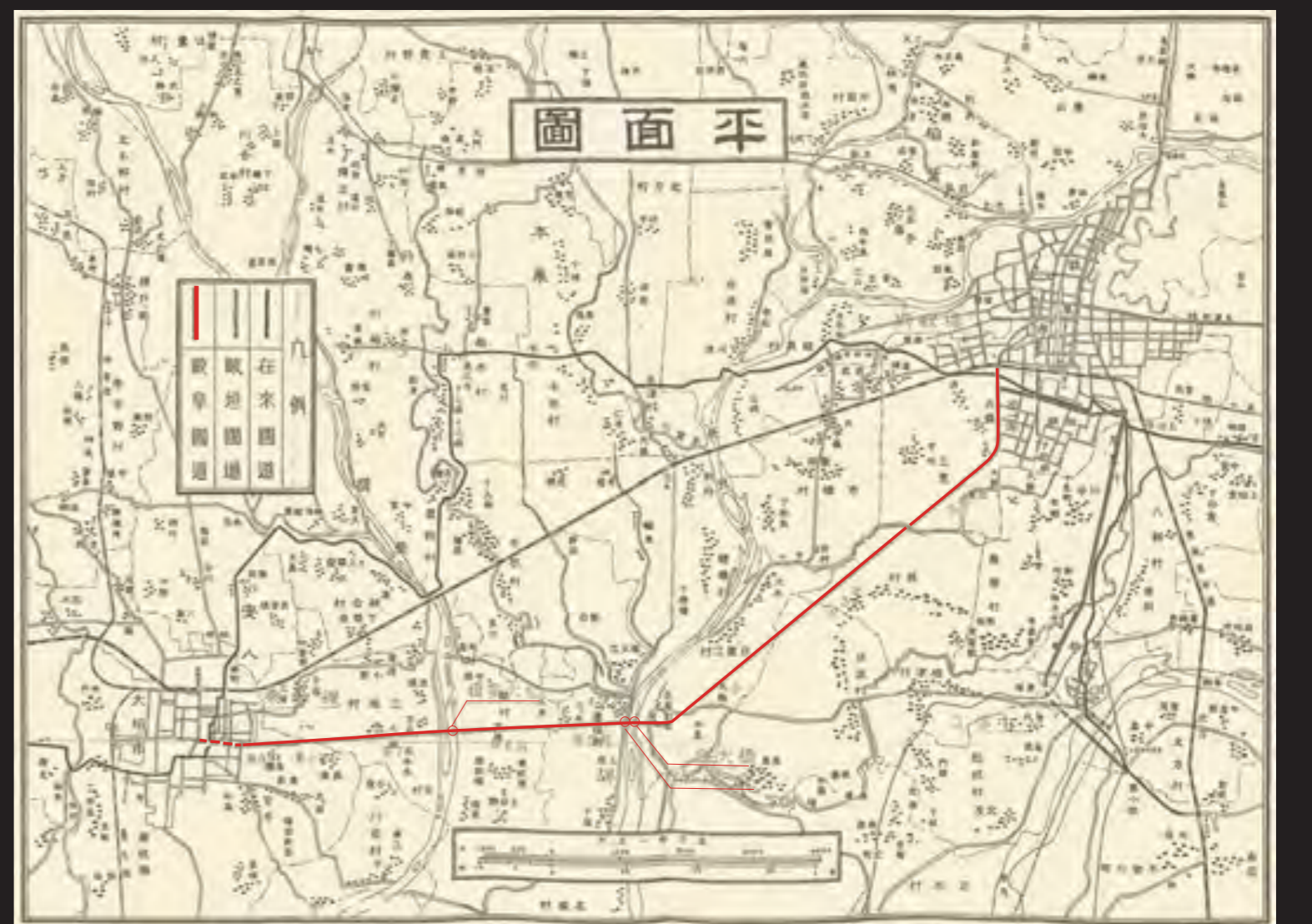
所在地：岐阜県大垣市および安八町

竣工年：1934（昭和9） 管理者：岐阜県

認定理由：岐阜・大垣間をつなぐ岐垣国道が失業対策事業として建設された際に、長良大橋とともに建設された6連曲弦ワーレントラス橋。



揖斐大橋の橋上で西を向いた風景。大垣市の行政界にあたる。視線方向に重なる鋼のビームが面白い。右手には大垣市の施設ソフトピアジャパンセンターのタワー（現在の大垣市の象徴）と、伊吹山の堂々たる山容が垣間見える。



▲ 構造形式は長良大橋と同じ。重厚な曲弦トラスが連続駅に並べられる。

▼ 橋脚は、コンクリートの円形の井筒2本を深さ24mまで挿入した上に渡されたアーチ状のコンクリート構造物である（上）。アクセスに後年設けられた橋には立派な親柱が設置されている。もとは揖斐大橋の親柱ではないか（下）。

▲ 『岐垣国道工事概要』（1940、岐阜県）に添付されている工事箇所全体の全容がわかる平面図。岐阜（右上）と大垣（左下）をダイレクトに結ぶ新動線として描かれ、長良大橋と揖斐大橋はそれぞれ要の位置づけであった。

美濃における二大中核都市として成長してきた岐阜と大垣は、比較的近接しながらも両市を連絡する国道は狭小かつ屈曲の多い旧態のままであったことから、昭和初期の失業対策事業として「岐垣（ぎえん）国道」の建設が計画された。この路線が長良・揖斐川を渡る箇所に建設されたのが長良大橋と揖斐大橋である。

両橋梁は同じ形式（曲弦ワーレントラス）の兄弟橋として、どちらも岐阜県庁内の北原嶺技師らによって設計された。当初は伊勢電気鉄道と併用する予定で建設されたために、広幅員で頑丈な構造となっているが、結局鉄道工事はされなかった。

現在は国道重要な道路橋（県道）として機能している橋であり、揖斐大橋からは伊吹山を背景とする大垣市街地の遠景を望むことができ、大垣市の象徴的な東門の存在感を放っている。

